

不寛容の芽を摘み取ろう

上うえ 廣ひろ 榮えい 治じ

旧暦では、今の暦の五月六日頃が「立夏りっか」、つまり夏に入る日で、一年中で最も快適な季節がここから始まるとされてきました。「立夏」と同じ意味の季語「夏立つ」「夏来るきた」には、待ちかねていた季節の到来を喜ぶ浮き立つ気分が感じられます。

さて、この喜ばしい季節に先立つ春の大会で、私は現代の若者たちの不幸について語りました。彼らは、幼い時から競争原理で競わされ、人としていちばん大切なことは何か、人としての優しさとは何か、などという人生の問題について、深く考える余裕を持たされていないことを指摘しました。

しかも、大人たちは競争原理に立って、彼らを叱り拒否するだけで、彼らと共に真摯しんしに考え、共に悩もうとはいいたしません。若者たちは、その本性ほんせいにおいて、正しく美しく幸福に生きたいと願っているのに、彼らの素直な意欲を温かく見守り、支援してくれる場がないのです。若者たちの愛を受け止め、愛を以てもつ彼らを遇する場が閉ざされているのです。

そうした不幸な状況を生み出してしまったのは、他ならぬ私たち大人なのです。混迷せる若者を生み出したのは誰か、若者たちをここまで追い詰めたのは誰なのか。そのことを忘れて、いたずらに若者の未熟

を責め、彼らの無知を嘆くことが、いかに不毛な技であるか。大人たちこそ、自らの内なる競争原理や自己中心主義を猛省しなければならぬのではないか、そんなお話をいたしました。

賢明な皆様はもうおわかりのことと思います。私が申し上げたことは、ただ大人と若者の関係だけではないのです。これは私たち一人一人にとって、まさに直接的な問題なのです。例えば、私たちの会に権威主義や思い上がりは、全くなかったでありましょうか。自らを高しとして、若者や後進をいたずらに蔑んだことはなかったでしょうか。心の内で侮り誇り拒み貶めたことはなかったでしょうか。

人間の組織や社会においては、必ずといってよいほどに、自らの経験や知識を金科玉条として、他者の説を否定し排除しようとする動きが出てきます。誰であれ、経験や知識を積むほどに自説に固執して、他者に不寛容になってゆく傾向がみられます。組織が年月と共に硬化化するのもそのためです。とすると、私たちの会においても、時として、長く熱心実践し続けてきた人に、この悲しい不寛容や考え方の動脈硬化が見られないとは限りません。そうした病の予防法や治療法は何か。私たちは一人一人、真剣にこの病と取り組まなければならないと思います。

『古事記』や『源氏物語』の研究で、古今未曾有の大業績を残した本居宣長は、終生ただひたすらに学び思考し、教え著述し、小児科医として世に尽くした江戸時代中期の碩学です。その宣長は終生、偉そうなことを言う硬直した「大人」を嫌っていました。例えば、京都で堀景山に学んでいた若い頃に、友人の清水吉太郎に宛てた手紙に、次のような内容を記しております。

「学者たち、世の大人たちは、自分が聖人や孔子の道を踏む者だと自任して、まことに傲慢であり他人の説を聞くとうとしない。そのため、人に対して奢り昂り横柄をきわめている。ところが、その為すところは

きれいごとを言うのみで、世のためになることは毛の先ほどもしていない。ただ、誰が正しい誰が悪いと言つて、和を乱すばかりではないか」と。

実に痛烈であります。私たちもまた、実践の一事を忘れれば、宣長が攻撃する学者や大人たちと同じ穴の貉むじなになりかねないことを自戒しなければなりません。しかし、このように聖人君子を自認する人々を攻撃する宣長が、孔子だけは別だといつて、『論語』の話を引いています。

ある時、孔子が弟子たちに聞きました。「もし世間に認められるようになったら何をしたいか」。弟子たちはみな、立派な政治上の抱負を語りました。ところが、一人曾皙そうせきだけが他とは違うことを言います。「暮春に」といいますから、ちょうど今頃の季節です。「季節に適かなった美服を着て、若い人たち六、七人と、故郷の川へ遊びに行きます。水浴びをし、涼風りようふうを楽しみ、歌を歌つて帰りたいものです」

孔子先生は深く頷うなずき、ああ私も曾皙と同意見だと言います。ここには硬直し偉ぶった態度というものが微塵みじんもありません。また、そこには人生を若者と共に楽しむ至福の瞬間が語られています。愛があり寛容の喜びがあるのです。

宣長の、実践がともなわない道学者嫌いと孔子好きは終生のものであつたらしく、その晩年の歌にも「聖人は しこ（醜）のしこ人 いつはりて よき人さびす しこのしこ人」……つまり、人生を楽しんでいる「よき人」を悲しい気持ちにさせてしまう聖人君子などというものは実に醜悪しゆうあくな存在であると言つたのです。しかし、「聖人と 人はいへども聖人の たぐひならめや 孔子はよき人」……孔子だけはそんな醜悪な口先だけの聖人君子ではない、「よき人」なのだ、と歌うのです。

人は誰でも幸福を願つて、人生を真摯しんしに生きようとしています。聖人の道に適っているかどうかなどと

いう、頭でっかちで観念的な知識だけをもとにして、人が幸福に生きようとする思いを邪魔してはならないのです。春の大会で私が申し上げたのも、この宣長の意見と全く同じことでありました。

「五つの誓」のうちに「人の悪をいわず、己おのれの善を語りません」「気付いたことは、身がるに直ぐ行います」とあります。己を高しとして他説に耳を貸さないのは、この誓いに背そむくことです。「五つの誓」が骨となり肉となってさえいれば、多くの組織にありがちな過あやまちの轍ごは踏まないはずです。

実践倫理五〇年の歴史は一面では輝かしい成功への歩みではありましたが、その反面で、わが会だけが、自分だけが正しいという、奢りの芽を育てる温床になっていなかっただけとも限りません。新たな五〇年への一步を踏み出した今、私たち一人一人が、真摯に、謙虚に自らの日常を顧みる必要があります。そして、人の組織にはびこりがちな不寛容の芽を摘み取っておこうではありませんか。

わが会のさらなる発展のために、心と耳目を大きく開いて他説を聞き、謙虚に考え、矯ただすべきを矯し、気づいたことは身軽に行なうてまいりましょう。会友一人一人が、この不寛容の悪から免まぬがれることができ、た時こそ、わが会の前途はまた、洋々として開けることでありましょう。純真な若者の思いを快く受け入れ、その力を伸ばしてやることのできる会、幸福でありたいという万人の願いを支援することができ、それがわが会のあるべき姿であります。かくあれば、孔子も「ああ、私もその通りだと思ふよ」とおっしゃることでありましょうし、宣長も、この会だけは、道を説きながらも「よき人さびす」ことのない、寛容で心豊かな集団だと認めてくれるに違いありません。

「己の善を」思うことなく「人の悪を」責めることなく、「新しく大地に生き貫ぬく」ことを、ここに再び誓い合おうではありませんか。